

さあ十兵衛、今度は是非に來よ四の五のは云はせぬ、上人様の御召ぢやぞ、と七藏爺いきりきつて門口から我鳴れば、十兵衛聞くより身を起して、なにあの、上人様の御召なさるとか、七藏殿それは眞実でござりまするか、嗚呼なさけ無い、何程風の強ければとて頼みきつたる上人様までが、此十兵衛の一心かけて建てたものを脆くも破壊るゝ歟のやうに思し召されたか口惜しい、世界に我を慈悲の眼で見下さるゝ唯一つの神とも仏ともおもふて居た上人様にも、真底からは我が手腕たしかと思はれざりし歟、つくづく頼母しげ無き世間、もう十兵衛の生き甲斐無し、たまたま当時に双なき尊き智識に知られしを、是れ一生の面目とおもふて空に悦びしも真に果敢無き少時の夢、嵐の風のそよと吹けば丹誠凝らせし彼塔も倒れやせむと疑はるゝとは、ゑゝ腹の立つ、泣きたいやうな、それほど我は腑の無い奴か、恥を知らぬ奴と見ゆる歟、自己が為たる仕事<sup>おのれ</sup>が恥辱を受けてものめのめ面押拭ふて自己は生きて居るやうな男と我は見らるゝ歟、仮令ば彼塔倒れた時生きて居やうか生きたからう歟、ゑゝ口惜い、腹の立つ、お浪、それほど我が鄙<sup>さむ</sup>しからうか、嗚呼嗚呼生命も既いらぬ、我が身体にも愛想の尽きた、此世の中から見放された十兵衛は生きて居るだけ恥辱をかく苦惱を受ける、ゑゝいつその事塔も倒れよ暴風雨も此上烈しくなれ、少しなりとも彼塔に損じの出来て呉れよかし、空吹く風も地打つ雨も人間ほど我には情無からねば、塔破壊されても倒されても悦びこそせめ恨はせじ、板一枚の吹きめくられ釘一本の抜かるゝとも、味気無き世に未練はもたねば物の見事に死んで退けて、十兵衛といふ愚魯漢は自己が業の粗漏より恥辱を受けても、生命惜しさに生存へて居るやうな鄙劣な奴では無かりしか、如是心を有つて居しかと責めては後にて吊はれむ、一度はどうせ捨つる身の捨処よし捨時よし、仏寺を汚すは恐れあれど我が建てしもの壊れしならば其場を一步立去り得べきや、諸仏菩薩も御許しあれ、生雲塔の頂上より直ちに飛んで身を捨てむ、投ぐる五尺の皮囊は潰れて醜かるべきも、きたなきものを盛つては居らず、あはれ男児の醇粹、清浄の血を流さむなれば愍然ともこそ照覧あれと、おもひし事やら思はざりしや十兵衛自身も半分知らで、夢路を何時の間にか辿りし、七藏にさへ何処でか分れて、此所は、おゝ、それ、その塔なり。

上りつめたる第五層の戸を押明けて今しもぬつと十兵衛半身あらはせば、礫を投ぐるが如き暴雨の眼も明けさせず面を打ち、一ツ残りし耳までも扯断らむばかりに猛風の呼吸さへ為せず吹きかくるに、思はず一足退きしが屈せず奮つて立出でつ、欄を握むで屹と睥めば天は五月の闇より黒く、たゞ囂々たる風の音のみ宇宙に充て物騒がしく、さしも堅固の塔なれど虚空に高く聳えたれば、どうどうどつと風に来る度ゆらめき動きて、荒浪の上に揉まるゝ棚無し小舟のあはや傾覆らむ風情、流石覚悟を極めたりしも又今更におもはれて、一期の大事死生の歧路と八万四千の身の毛豎たせ牙咬定めて眼を睜り、いざ其時はと手にして來し六分鑿の柄忘るゝばかり引握むでぞ、天命を静かに待つとも知るや知らずや、風雨いとはず塔の周囲を幾度となく徘徊する、怪しの男一人ありけり。